

## 第3分科会 得意分野を磨き遊びの 専門性を高める

助言者	山口 幸彦 (鹿児島大学教職大学院特任准教授)
司会者	福田 さつき (鹿児島女子短期大学附属すみれ幼稚園)
問題提起者	添田 千幸 (幼保連携型認定こども園つばき幼稚園)
記録者	上ノ町 涼夏 (幼保連携型認定こども園つばき幼稚園)
記録者	永野 莉奈 (幼保連携型認定こども園つばき幼稚園)
ホスト	川畑 祐司 (幼保連携型認定こども園つばき幼稚園)
運営委員	尾方 みゆき (鹿児島さくら幼稚園)

### 【研究課題】

子どもと共に育つ保育者

### 【研究・研修の視点】

令和元年10月より幼児教育・保育が無償化となり、早くも3年目に入った。私たちは、保育に求められる『良質な保育とは』ということを常に自問自答しながら日々、保育を子どもと共に織りなしている。また、本園は、平成30年度より幼保連携型認定こども園へ移行し保育者数も増えたことで、より良い組織の在り方を模索しながらも同僚性、人間性を保育者同士が、お互いに高め合い磨き合っているところである。

さて、そんな中、今年度は、若手の保育者が増え新しい清々しい風が、本園を吹き渡り始めたところである。新学期当初は、コロナ禍での子育てとなりメディア漬けだったのか、コミュニケーションが上手く取れず集団に中々馴染めない子どもも多くみられ、若い保育者は保育をこなすことに必死のように思われた。このような時だからこそ、同僚に助けられたり、認められたり、励まされたり、支え合いながら職員同士も信頼関係を築けていけるのではないかと思う。

そして、このような職場環境の下で保育者同士が、お互いの良さや強みを認め合い、引き出してあげることで自信をつけ、保育が楽しくなっていくのではないかと考える。保育者自身が、自分の好きなことや得意なことを職場で発揮し、保育に取り込み生かすことは、保育者自身も子どもと共に楽しめる保育となり、これこそがまさしく保育の真髄なのではと捉えた。

子どもと共に遊びを楽しむことで、遊び込んでいる子どもの気持ちをより深く理解し、子どもの育ちを同僚と分かち合い、考察（ディスカッション）することで、保育のおもしろさを実感し遊びの専門性を高めることに繋がるのではないかと考え、研究することとした。

### 【研修の手がかり】

- ・ 保育をするにあたり保育者自身の強みを知り、それを生かした保育の展開を考える。
- ・ 保育者が自己を発揮し保育を楽しみ、子どもに活動の喜びや楽しさを伝える環境や援助を考える。

### 【研究計画】

#### ◎令和4年度

- ・ 得意分野を生かした遊びの展開を考える。
- ・ 環境や援助を通して子どもの育ちについて考える。

#### ◎令和5年度

- ・ 保育者の得意、不得意分野を自己分析し、実践・研究する。
- ・ 保育者の協働性に着目し、専門性を高める。

## 【発表の概要】

### 1 研究・研修のテーマのとらえ方

本園では、“わくわくランド”という縦割りでの異年齢交流保育を行っている。“わくわくランド”では、4つの好きなコーナー（段ボールコーナー・空き箱コーナー・かなづちコーナー・昔あそびコーナー）に分かれて、好きな遊びを経験している。

今回、このテーマを考えるにあたり、本園ではまず保育者の強みを知るために、“好きなこと探し”を行った。そして、わくわくランドの活動を基に、子どもたちが遊びを楽しめるように、保育者の“得意分野”を遊びとして計画した。又、同僚の良さを互いに認め合い、子どもも保育者も楽しみながら遊びを展開していけるよう、実践を工夫した。保育者が好きなことを遊びとして取り入れ、自己発揮できるよう、そして子どもたちが主体性を発揮して活動を展開していけるような保育実践を考察（ディスカッション）していきたい。

### 2 研修の内容

- ・ 園内研修で保育者自身が好きなことをホワイトボードに付箋で貼り、職員間で共有した。
- ・ 保育者自身の好きなことを子どもの遊びに繋がるように3つのグループに分かれ、グループ毎で保育実践を考えた。

①『砂場遊び』 ②『自然物とかかわる遊び』 ③『音を楽しむ遊び』

### 3 研究の方法

- ・ 『砂場遊び』『自然物とかかわる遊び』『音を楽しむ遊び』の3つの活動を通し、子どもと共に遊びを楽しみ、展開していく方法を工夫し、子供の育ちを考察して、新たな遊びを構想する。

### 4 実践例

- 『砂場遊び』 ➡ 2歳児・3歳児・異年齢児
- 『自然物とかかわる遊び』 ➡ 異年齢児
- 『音を楽しむ遊び』 ➡ 4歳児

### 5 まとめ

- ・ それぞれの遊びを通し、保育者自身も楽しもうとする気持ちが高まり、子どもと一緒に取り組むことで“喜び”“楽しさ”“達成感”を味わい、保育の面白さに気づくことができた。
- ・ 保育者の得意分野を生かした遊びを行う中で、自分も知らなかった発見や気づきがあり、子どもから学ぶことも多く、子どもと共に学ぶ機会になった。又、自分の新しい得意分野を見つけながら新しい活動をどんどん保育の中に取り入れていこうと思える良いきっかけとなった。このことは、幼児教育の質向上に繋がっていくのではないだろうか。

### 6 今後の課題

保育を行う中で、保育者が好きなことを生かしながら行ってみてどんな様子だったのか、職員間で情報共有し、子どもの育ちにも着眼しながら、子どもはもちろん職員も楽しめるような保育の在り方を考える時間を設けていきたい。

## 【討議内容】～グループ発表より～

問) 子どもと共に遊びを楽しむために、どのように取り組みを行っているか。

- ・ 自由遊びの時間があり、事前にどのようなことをしたいか子どもたちに聞いたり、子どもたち自身で好きなあそびができるように工夫している。好きなことや興味のあることを知り、保育に取り入れることで主体的な遊びができるのではないかと思った。
- ・ 朝の時間で子どもたちが興味関心をもっている遊びをノートに記録してそのノートを職員間で周知し子どもたちの遊びが充実できるように準備をしている。午後の預かり時間では、子どもたちが好きな活動や遊びを選んで部屋で過ごせるという工夫をしている。

- ・発表会で取り組んだものを発表会が終わったら終わりではなく、その後の遊びやゲームあそび等に繋げていたり虫が好きな子どもが多いクラスは虫の家を作って飼育をしたり色々調べたりして、繋げている。
- ・5月～8月の間に戸外に数カ所に分けて『夏と遊ぼう』という子どもたちがやりたい、作りたい遊びのコーナーを設け、主に作りたいものをお店屋さんごっことしてクラス毎に売り出している。
- ・絵本を読み、子どもの反応や会話の中からその内容を保育や遊びに繋げている。
- ・年長組でファーストフードや巨大迷路作って、年中、年少組を呼んで異年齢交流の場を設けている。

問) 更に得意分野を生かすために、職員間でどのようなディスカッションをしているのか。

- ・ディスカッションの時間を設けられない園が多くあり、職員室での日常会話や、保育内容などを大切にしている。また、苦手な所を研究保育に取り入れ、得意分野にできるように他の意見をもらっている。
- ・壁面を飾る際に他のクラスを見て良いところを取り入れたり、先輩後輩関係なく子どもたちのかかわり合いから学びあっている。
- ・月に一回職員会で1分間スピーチを行っており、自分の好きなこと、行った場所で素敵なことがあった、美味しいものを食べた、趣味などを職員会で話してコミュニケーションをとっている。
- ・中々時間がとれてない現状があるが、個人的に自分が苦手なことを得意な先生に聞いてみたり、園全体では時間がとれないため、学年だけでも話し合いの時間を設けたりしている。
- ・終礼や職員会議、午睡の時間に意見交換交流をしている。活動のなかで得意な先生が担当したり、できなかつたり、困ったりするときは先輩の先生や得意な先生にアドバイスを聞いたり、手伝ってもらうことで、いい保育につなげている。
- ・取り組みの中で、新体操、剣道、ダンス、絵画、体操、それぞれ得意な先生が得意な分野で輝けることを保育活動の中で取り入れて、子どもたちに伝えたり、一緒に学んだりしている。
- ・年に一回クラスでチャレンジ保育という、得意分野や、子どもたちに学ばせたいことを取り入れ保育をし、他の保育者に見てもらって評価をしてもらっている。
- ・園芸、畑、裁縫、製作など、メインで4つの係があり職員全員4つの係の中で好きなことや得意な分野に所属して円滑に園生活が送れるよう得意なことを生かして活動を取り入れている。
- ・研修日を事前に決めて行うことで、研修の日程がとりやすくなる。
- ・二人担任制の園は、年上の先生が年下の先生に教えることで学び合いに繋がっている。
- ・職員同士で良いところを3つ程褒め合い前向きな気持ちで保育ができるように工夫している。
- ・クラス数が多かつたり、園児数が多かつたりする際は中々全体での学び合う時間を設けられないため、学年ごとに横のつながりを大切にしている。

## 【助言者のまとめ】

### ① 問題提起に関しての見解

得意分野は自分が「好きと感じる苦にならないこと」で、このことが上の立場にいけばいくほど保育者というものは、得意分野においては一人がみんなと同じというよりも、それぞれが得意なことを活かした保育を実践していくべきである。しかし今現在、子どもたちが成長していく中で同じようなことが同じようにできなければならないということがまだ日本の教育の中に残っているため、子どもたちの得意なことが伸びない現状がある。そのため、奪還策として得意分野から役割を決め保育者間での目配せ、声かけを行い、一方向性ではなく

双方向性で行うようにしたり、実践したことが上手いかなくとも次に活かせるように工夫したりする必要性を感じる。失敗したことや取り組んだこと・結果などは記憶ではなく記録に残すことが大事であり、保育記録をどのように整理していくか考える必要がある。

#### ② コロナ禍における対策と保育の質・向上について

コロナ禍で学ぶということは「マイナスに学ぶ」ではなくて「プラスに学ぶ」であってほしい。いつ何が起きるかわからない時に、幼稚園で子どもたちが「どうすればいいか」と考えるという教材があり、事実をもとに学ぶ材料がある。子どもが喜び・楽しさ・達成感を感じるためには、場所、時間、道具などの環境が大切である。特に時間をとることが大切であり、やらせて終わりではなく、「まだまだ時間があるよね」と置き換えて、時間をたっぷりとったりする工夫が必要である。しかし、子どもたちは遊び込めば遊び込むほど、遊びを止めないというジレンマがある。

保育の質・向上においては、研究保育の場面を見た保育者が意見を出し合い、また研究保育を行った保育者がどういう意図をもって保育を行ったのかを発表し、保育者間で考察をすることがインシデントプロセス法へとつながっていくことを検討して保育に望むことが理想である。しかし、一人で研究保育を行うには限界があるため、保育者間で得意なこと、好きなことを出し合い、グループ協議を行うことで質・向上につながっていくと考える。上手いかなかったことは整理することが大事で失敗することは悪いことではなく次を生み出すためのエネルギーである。

そのことはいずれ、子どもの財産になる。

#### ③ 資質のために必要なことは

保育者自身の実践力を高め、集団としての組織力が今から重要となる。(自分ができないことを補えあえる組織、メンバーになれるようにリーダーシップが影響されている。) また、遊ぶことは勉強であり、遊びと学びはイコールだと本気で思った保育や教育があるべきである。

ねらいの5領域を常に考えながら保育をする。時々小学校への接続へのかかわり3つの資質能力を話題にして教育課程を連続する時には、10の姿を考える。

#### ④ 今後への期待・まとめ

- ・保育記録をどのように整理して、または簡単にまとめるなどして効率化を図りたい。
- ・指導、支援という言葉をよく使うが園児に対する一方向性のイメージが強い。しかし保育の場合は、かかわりをもつことが大事であり、双方向性で園児が保育者にかかわってきたときに、保育者が応答することで保育の質が向上していく。
- ・保育者が自分の好きなことにどっぷりと浸かってみることで楽しい遊びの発見になり、保育でその体験をどのような遊びとして、どこに生かすか検討することが大切である。

子どもとたくさん遊ぶ保育者が良い保育者であり、遊びの中で保育者自身の好きなこと、得意なことを見つけ、保育に取り入れて行ってほしい。現状として、今ある遊び(学びの基礎)が小学校へ就学する際に必要性があるのか問われているため、小学校との連携が必要である。子どもは育てたいように育つのではなく、育てたように育つので好きなことを、よりたくさん子どもと一緒に遊ぶ保育者を目指してほしい。そして、園児や保育者の満足感は、保育者の満足なしには生まれないので探求心のない保育者ではなく、遊び心のある保育者を目指してほしい。